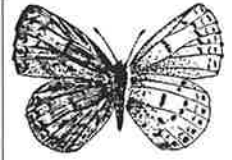


財団だより

多摩川

1990. 12 第48号



ルリシジミ (シジミチョウ科)
 開張30mm。傘の翅はきれいな水色、
 早は外周が褐色。裏は白い。
 食草クララ、フジなどマメ科の
 植物。



多摩川右岸 平瀬川の水質を浄化する目的で作られたファブリダム

■ 多摩川現風景 ■

(4) 河川敷内水質浄化施設

河川の景観を構成する要素の中には、さまざまなものがある。流水や砂利原、草地、樹木、小動物などの自然的要素とともに、人工的な要素である護岸や堤防といった治水施設、取水堰や水門といった利水施設、さらには、スポーツやレクリエーション利用に供する公園施設、それに橋などである。ところが、多摩川には全国の川に先駆け、多摩川の水質を改善するための水質浄化施設がある。

この河川敷内浄化施設とは、本川に流入する支流からの汚れた水を高水敷内の地下に設けられた礫槽を通して浄化しようとする施設である。これは礫の表面に付着する微生物により汚濁物質を吸着する作用を応用したもので、施工が簡単でランニングコストがかからず、管理が容易ということで、当初、多摩川左支川の野川河口(二子玉川)に昭和58年設置され大きな評判を得た。その後野川の改良型ともいうべき同様施設が、平成元年に対岸の平瀬川河口で完成している。多摩川らしい光景とってしまえばそれまでだが、河川管理者が水質対策に取り組む姿勢を見せた事の意義が大きい。そしてできれば早い時期にこうした施設が視界から消えることを願うばかりである。

● 関連する財団の助成研究

〈学術研究〉

- ①多摩川流域における河川底質土を中心とした汚染物質の挙動および自然浄化能力について〔有害重金属の河川底質土における吸着と溶質機構の解明〕

堀内清司 1977 No.7

- ②野川・仙川の浄化処理のための調査実験研究〔野川における自浄作用と藻類生産力〕

鈴木基之 1979 No.19

- ③水路を利用した水質浄化工法と二ヶ領用水清流化

有水 疆 1982 No.53

- ④多摩川における汚染有機物の流出除去過程に関する研究

石渡良志 1984 No.76

- ⑤多摩川水系の汚染と自浄作用に関する総合的調査研究〔生物学的にみた多摩川のあるべき姿〕

近藤典生 1985 No.78

- ⑥多摩川支川の水質と下水路の浄化作用に関する研究

浦野紘平 1986 No.89

〈一般研究〉

- ⑦小仏川、案内川、南浅川流域の水質調査とその河川をきれいにする方法を探る

加藤文江 1990 No.66

多摩川散歩



宗三寺(昭和40年撮影)

日本民話の会会員 萩坂昇

六郷の渡し跡

天正18年8月(1590)江戸城に入った徳川家康は、慶長5年(1600)江戸の三大大橋に数えられた六郷大橋を架橋させたが、たびたびの洪水で流失されるので貞享5年(1688)7月に渡船による通行に切り替えた。以来200年にわたって渡船時代がつづき、明治元年9月20日、明治天皇江戸入城の際は、六郷川に36艘の舟をならべた船橋を架けた。「明治天皇御通葎船橋の碑」も六郷の渡し跡にたっている。

川崎宿と兵庫本陣跡

川崎宿は、元和9年(1623)東海道の53番目に宿駅に制定された。宿は、今の小川町あたりから六郷橋まで、小土呂、砂子、新宿、久根崎で構成され、小土呂、砂子はいまま地名、バス停名となっている。

兵庫本陣跡は、川崎宿の名主、田中兵庫の本陣のあったところ。兵庫は、川崎宿を財政的にたて直ただけでなく、多摩川、二ヶ領用水、酒匂川の治水にもつくし『民間省要』の著は、幕府政治の改革をうながした。川崎宿の先覚者田中兵庫の墓は幸区小向の多摩川べりの妙光寺にある。

川崎宿を語る宗三寺

開山は、鎌倉時代で僧領玄統という。本尊の如意輪観音は木仏で海中から出現したと語られている。また、元和元年(1615)大阪城が落城したとき豊臣方の落武者が宗三寺に隠れすんで徳川家康を

狙ったが果たせず、川崎宿に土着して商人となり、宿の発展につくしたという。

本堂左手奥には、この地を領し、北条氏直に仕えていた間宮豊前守信盛の墓がある。信盛は、天正18年(1590)小田原城落城のときに戦死した。法号を端竜院雲谷宗三といたので、寺名は宗三寺、端竜山と号したという。

墓地の一角には、川崎宿の廓で亡くなった遊女や飯盛女を供養した碑がたちいまも香華が絶えず川崎宿の昔を伝えている。

稲毛神社

山王さまとも呼ばれている。江戸時代には川崎宿には13の小さなお宮がありその総鎮守で明治の初めに稲毛神社と改称した。

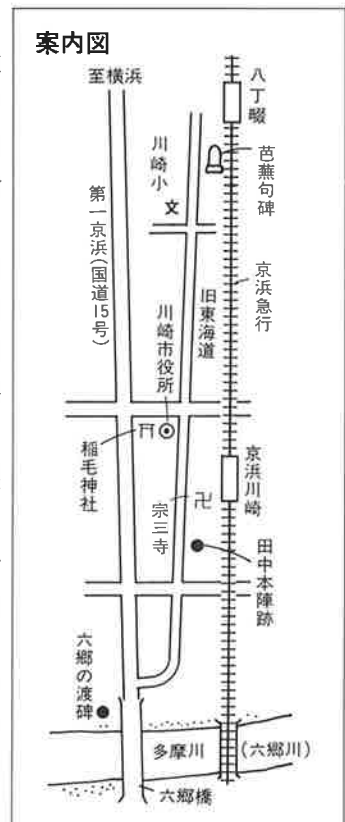
昭和2年の川崎市第1回メーデーの会場はこの境内で行われ1000人の労働者が集結し、デモ行進は、鶴見区の総持寺までだった。境内の大銀杏は、昭和20年4月15日の大空襲をうけたその傷などがあり、川崎市とともに歩んできた神社である。

芭蕉句碑

八丁驛近い道べりに「麦の穂をたよりにつかむ別れかな」の句碑が建っている。

元禄7年(1694)5月、俳人、松尾芭蕉は望郷の念やみがたく故郷(伊賀の国上野)へと旅立ったとき、送ってきた門弟と川崎宿で詠んだ句である。芭蕉は、その5ヵ月後「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句を最後に51歳の生涯をとじている。

案内図



私と多摩川



「親子なんでも学習会」でのバードウォッチング
関戸橋附近（1990. 5）

調布市東部公民館長 山花 郁子

私と多摩川のかかわりは、帝大セツルメント（本所区柳橋大学隣保館）のお伽組のキャンプ生活から生まれた。

——きょう かわで みずあそびしたの。つめたい みずのなかに ゲタをはいたまま はいったらせんせいが わらったの—— これは、当時の先生がのこしておいてくれた私の4歳のときのことばの記録である。小さい女の子がはいていた下駄の鼻緒は赤い色だったろうか……と、つめたく澄んだ川に足をひたした、そのときの感触もよみがえるような、なつかしい風景がひろがる。

まもなく私も定年を迎える歳となったが、調布市でこれまで担当した（婦人会館・児童会館・図書館・公民館）文化活動は、いつもこの多摩川の原因風景につながって、流れつづけていたようにもおもわれるのだ。とりわけ子どもの本をとおして身近かな人々とのかかわりを深めているが、これもふと気がついてみたら、いつのまにか子ども時代の風景に連れ戻されていったような、そんなめぐりあわせのようなものを感じている。それだけ年を重ねてきたともいえるのであろうか。

多摩川べりに位置する西部公民館では、たまたま多摩川の自然と野鳥たちをこよなく愛するカメラマン佐々木一弘氏との出会いもあり、多摩川の

自然を背景にさまざまな事業をこころみた。『親子なんでも学習会』の企画もその一つであり、参加した親子と共に、バードウォッチングを楽しんだり、釣り糸のテグスで足指をひきちぎられたドバトたちを救うために、暑い陽ざしの河原を歩きまわって、テグス拾いをしたりもした。

いじめないで鳥たち、をテーマにして、佐々木先生にいろいろなことを教えてもらいました。スライドや写真を見たり説明を聞いたあと、多摩川の河原に行きました。テグスや釣り針が落ちていないかと一生懸命に探します。「あっ、あった!」どこからか声が聞こえます。みんなの拾ったテグスは、袋いっぱいになりました。途中でハトが何びきかいて、その中で足にテグスのからまったのが三びきいました。佐々木先生はそのハトを助けようとしたのですが、逃してしまいました。

〈お願い〉 よく釣りをする人は、釣り針の始末を忘れずにしてください。鳥を見て石を投げつける人はいませんか？ 鳥だって生き物です。自分に石を投げつけられると思って、こんどからは石を投げないでください。 6年3組 小林加代子

鳥たちにかわって訴えてくれた加代子さんは、もう高校生。加代子さんにとっても、多摩川と野鳥。佐々木先生や公民館という場で出会った人々とのかかわりを心にとどめて、自然をみつめる目をより深めてくれているにちがいない。

現在私は、野川に近い東部公民館で、公務員生活最後の仕上げを急いでいる。そして、ときには、野川の自然散歩道を抜けて、多摩川の土手から古巣の西部公民館まで自転車を走らせることもある。そんなときいつも、昔多摩川で遊んだ無邪気な女の子の姿を心に描きつつ、川の流れて沿って、たどりつく道に思いを凝らしてみる。

自然とのふれあいの中で出会った人と人との、かかわりを、いつまでも大切にしたい……と。

甦れ！多摩川

多摩川紀行

⑦ 沢井～東青梅下奥多摩橋(8km) 山道省三

10月21日日曜日。奥多摩の晴れた川原にさわやかな秋風が吹いている。九月になってカヌー下りをする予定が台風の到来のため何度か中止せざるを得なかった。休日を選ぶのは、川で遊ぶ人達を見ることと、カヌーの単独行は万一の場合助け求められる事もある、人手の多い休日が安心できるという理由による。多摩川に限らず川は私にとって楽しい所である反面とても怖い所でもあるのだ。

沢井の駅から河床までは急坂を歩いて下っていく。小澤酒造が経営している酒倉とレストランを横切って川に降りていくと、秋の日差しの中でキャンプやバーベキュー、写生大会と大変な賑わいを見せている。

多摩川の水量は豊かで、以前横浜のカヌーイストと同じ所を下った時は夏場だったせいか水量が少なく、さほどの脅威も感じなかったが、今回はいささか恐怖感がある。この日の奥多摩湖からの放流は毎秒7.78t/秒の発電用放流が行なわれている。

気温不明、水温不明。これはいつも使っている温度計がコルクのケースの中で折れていて使えなかったからである。カヌーを背負子で運ぶとき壊れたらしい。というわけで手を水の中に入れてみる。冷たい。12～13℃といった所だろうか。川井からこのあたりの河床は大きな岩があちこちにある、その間をゆったりとした水が流れる。カヌーは一気に流れに乗ってすべるように下り出す。

流量が多いと河床の勾配が急なこのあたりでは相当なスピード感がありカヌーに乗っていてもコントロールのため回りの景色を見るゆとりがない。

途中二俣尾あたりで三ヶ所の落差工（流れを弱める為につくられた堰）に出会う。落差が約1 m ぐらいのおそらく砂利を川の中に寄せたものだろう

うか、一瞬先が見えなくなってヒヤリとする。さらに下って石神前の落差工はテトラポットによる大きな落差工。ここは事前にカヌーで越えるのは難しいという情報を得ていたので、岸に着け様子を見に行った。川原で遊んでいる人に話を聞くと、たった今先に行ったカヌーが沈んで、引き上げられないでいるという。驚いて行ってみると、二人のカヌーイストが落差工の下でずぶぬれになって手を振っている。川を横断して設置されたテトラポットの堰なのだが、水が中に吸い込まれていて越えられない。下見をしないでそのまま突っ込んで行ったのだろう。艇はテトラポットの間にはさまったまま水圧で引き上げることができないでいた。近くで釣りをしている人に助けを求めたが、とうてい無理だったらしい。幸い人間は放り出され助かったようで、対岸まで乗せて行ってくれと言う。堰の端を歩いて迂回し荷物とずぶぬれのカヌーイストを運んであげたが、寒さなのか恐怖なのかカヌーの上で震えていた。地形図に表示されていない河川のこうした仮設の構造物は、カヌーやボートで川遊びする人にとってはとても怖い存在だ。だから川を下りながら釣り人や近所の人にとびたび下流の様子を聞かなければならない。

先年、イギリスのチームズ川やオーストラリアのゴールドコーストを訪れた時入手したレクリエーションマップやボート用水路図には、瀬や淵、水深（潮位との関係も含む）、サービス施設などの情報が精緻に記載されていた。また川遊びや航行に関するルールも細かく決められている。彼地と多摩川を同格に並べることはできないが、多摩川がレクリエーション河川として現実に多くの人から利用されている今日、利用ルールを含めたレクリエーション情報のサービスが必要となっていないだろうか？ アウトドアレクリエーションやスポーツが盛んになっている今、多摩川は年中人であふれている。奥多摩のまだまだすばらしい自然環境を維持し、多くの人々の快適な利用に供するためにも今すぐにも対応が求められる。

案内図



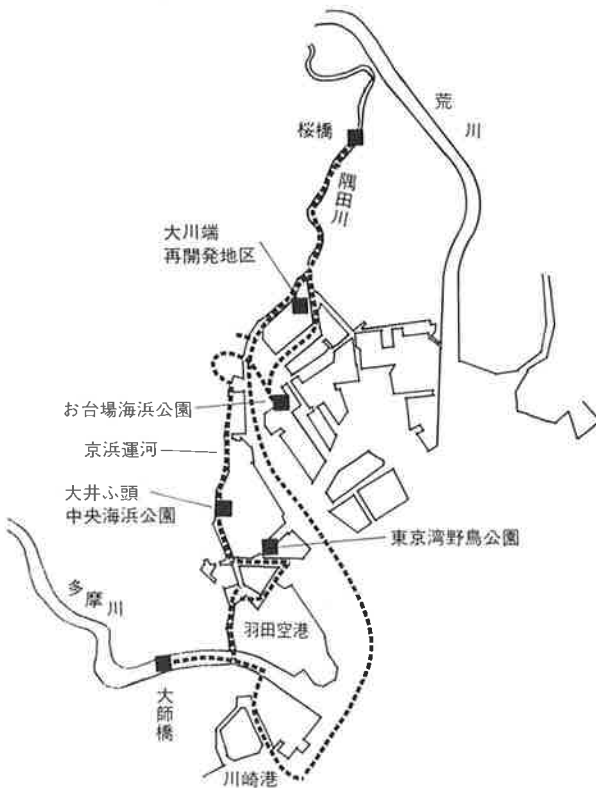
財団からのお知らせ

〜第4回 多摩川実査を終えて〜

財団の助成研究の現場を訪ねるとともに、研究者との交流や今後の研究の可能性を探ることを目的として今年で4回目を迎えた多摩川実査は、多摩川河口や東京湾のウォーターフロントを訪ねてみることにしました。

実査の行なわれた10月30日はあいにくの雨でしたが予定通り行ないました。参加者は、この地区に関連する研究者や財団関係者を含め総勢22名で、漁船をチャーターして浜松町の古川河口の船宿から出発しました。コースはまず隅田川を桜橋（台

東京湾・多摩川ウォーターフロント
視察ルート図



東区今戸)まで遡り、隅田川の護岸整備、佃島の再開発を見て、お台場海浜公園で昼食となりました。その後、芝浦、京浜運河を巡って海老取川から多摩川に入ったのですが、船頭さんの判断で大師橋までしか行けなかったのは残念なことでした。

帰りは川崎市側の大師運河を經由して川崎港入口から一気に浜松町へ戻ってきました。終日、強い雨と風で全員雨に打たれて寒い思いをしましたが、めったに見ることのできないコースでしたから、陸上から受ける印象とは全く異なる東京湾のウォーターフロントの体験ができたと思っています。

今度は天気の良い日にぜひもう一度という意見が懇親会の席で聞かれたこともあり、再企画の検討も行なってみたく考えています。

この多摩川実査は現在、公募形式をとらないで任意に参加者を募っていますが、こうした経験を踏まえ、いつかは公開で参加者を募って普段はなかなか見ることのできない多摩川ツアーを企画してみたいと思っています。



漁船を仕立てたウォーターフロント視察船

《“多摩川およびその流域の環境浄化に” 関する調査・試験研究” 募集》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に244件の研究に対して助成金を交付し、186件の研究成果を得ることが出来ました。

平成3年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」をひろく募集いたします。

対象者は、研究を専門とする方に限らず、一般のどなたでも研究に意欲のある方でしたら、ふるって応募して下さい。

研究について

多摩川は山梨県笠取山を水源とし、東京都と神奈川県の間境を経て、東京湾に至る138kmの一級河川です。その流域面積は、1,240km²といわれています。

多摩川を浄化するためには、その流域の環境をも改善しなければ目的は達成できません。

従って、河川や地下水の水質や水量、それらとかわりのある生物相や生物群集の研究、多摩川およびその流域の地質、地形などの自然科学的研究だけでなく、土地利用、地域計画、都市化に関連する諸問題、川の歴史や文化、環境観や環境教育など広く自然科学と社会科学にまたがった研究も大いに歓迎いたします。また、治水、利水、親水、流域改善計画に関するあらゆる領域にわたる広汎な研究を期待しております。

欧米に例をみない速さで、高齢化がすすみ人口の過密な首都圏の環境の中で、水域と陸域の統合体である多摩川の河川からその影響圏の環境を見直してみることは、極めて大切なことと考えます。

公募締切日 平成3年1月16日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。
〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(渋谷地下鉄ビル内)
電話 (03)400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	104	107	211	327,936
	B類	50	36	86	31,892
昭和59年度	計	154	143	297	359,828
昭和60年度	A類	15	11	26	44,777
	B類	9	5	14	9,119
	計	24	16	40	53,896
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
	計	15	29	44	57,436
昭和62年度	A類	9	15	24	42,704
	B類	6	12	18	9,932
	計	15	27	42	52,636
昭和63年度	A類	10	13	23	24,878
	B類	4	10	14	11,167
	計	14	23	37	36,045
平成元年度	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
	計	11	17	28	47,986
平成2年度 (10月末日現在)	A類	8	11	19	35,884
	B類	3	5	8	8,019
	計	11	16	27	43,903
合 計	A類	160	189	349	560,682
	B類	84	82	166	91,048
	計	244	271	515	651,730

※ A類は学術研究、B類は一般研究

- 発行日 平成2年12月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142

